

本田和子
皆川美恵子・森下みさ子著

わたしたちの『江戸』

(新曜社)

私的な体験を交えた
ささやかな御案内

中村 悦子

世にいうゴールデンウィークにこの小文を書いていきます。一日おきの忙しい天気が続いた四月ですが、五月晴れの美しさを被い隠すには惜しく、それぞれの木々が半年を通して整えた緑の装いを照らしてさわやかな宴を演じています。



それに一步近づくと枝元から葉先へと一葉一葉が微妙に色を違えているのがみえます。わたしのこのささやかな感動は、点描の画家たちの展覧会で、特にスーラの「モンマルトルのサン・ヴアンカン街・春」の前で確かなものとして昇化されたように思いました。

点描の画家とは、つまり「明暗の調子で輪郭線を排し、『形』をマス（塊）でとりだし、色は混ぜることなくモザイクのように異ったものを並置しつつ点で置いていく」（「精神の視角―点描の画家たち」朝日新聞、4月17日）という新しい技法の表現者としてまとめられます。

彼らのどの作品も声高の主張はないのですが、耳を傾けると、日常の中の風のさやぎ、光の戯れ、瞬時の静止の後動き出す人々の息づかいが響いてくるようでした。

しかし、この一見軽やかな自然さの裏に、光の分割描法という実に厳密な色彩の法則に裏うちされ、過酷ともいえる労働を要する日々の画業があったことは驚きでした。

ささやかにみえる一点の点描は、小さき故に確実な腕の動きを筆先に凝集させねばならず、その間に精緻な関連を保ちつつ行方由に根のいる時間との戦いでもあると、点描画修復に生命をかける黒江光彦氏の言葉は、心にしみました。（この意は、NHK日曜美術館「点描の画家たち」展による）

本の紹介に、何やら三題話めいた長い導入でしたが、実は、筆者の一人である森下みさ子氏から丁寧な依頼状と共に送られてきた「わたしたちの江戸」をかかえていたわたしに、この展覧会のわたしなりの錯覚が、この本へのわたしなりの理解に重なったように思ったのです。

本書の章ごとに、『年端もいかぬ、小さなものたち』を採し出し、つまみだした「近世の人さながらに、江戸市中をかけめぐって、ささやかな動きを知の世界にすくいあげ写しだした才女たちの仕事を示されています。見事な切り口をみせた実相を新鮮な視点で結びゆく華麗なまでの文に眩惑されつつも、彼らがそれら読み解きに駆使する膨大な知識の果積に気づかないわけにはいきません

でした。

しかし、まず、絵を楽しんだように彼女らの誘いのままに、小さきものを手がかりに江戸という未知の世界への旅を堪能し楽しむのが先でしょう。

さて、本書を読みたいと思ったら、借しげもなくカバーを取ってしまう図書館のものでなく、また汚れを嫌うのか包装紙で本を被う読書家のものでなく、自分のものが良いかもしれません。室町千代紙なるみ形の地紋に散る三人女の名札の流れにそって表紙を開きたいからです。ここで少しより道をすれば、この「知的に過激な烈女集団」（本書帯山口昌男氏の表現）の総師は、すでに三冊の単行本を上梓しています。したたかな挑発力をもった「異文化としての子ども」（紀伊国屋）は、ウィルレの「子どもの世界」から、本書の源流を示す「子どもの視野から」（人文書院）には「尾張童遊集」から、各々時代の子どもの像が引かれています。一冊目の保育事例からの見事な跳躍を示した「子どもたちのいる宇宙」（三

省堂）は、選書集の一冊であるため他書と右へならえの無地ですが、可能ならばいかなる絵が選択されたか想像するのも興味あることです。

画家の子どものをみる観察眼を尊重し、その絵を愛したのは倉橋惣三でしたが、これが更に絵解きの興を加えてこの保育文化研究者に流れているのでしょうか。

『わたしたちの「江戸」』には、「女・子どもの誕生」の副題がついています。昨今、様々な眼が都市的なるものの指標を求めて江戸へと注がれています。ここでは、それを女・子どもの浮上をしるしに説きあかす卓見をみせます。女・子どもが生活者であるとともに、またそれ故に文化の享受者でもあることで時代を活性化させたことです。

かつて江戸の本屋について知った時、一八五〇年の頃それは「即上方を圧倒して、完全に江戸中心に集中し」その数は、書物問屋八三軒、地本草紙問屋一四六軒、さらに貸本屋が七〇〇軒ほどとの記述に驚きました。（瀬田貞二「落穂ひろい」上・福音館）貸本屋がどの

ようなものか分らないままに、江戸八百八町のこと、ほぼ一町毎に図書館があったわけかと思ったことでした。

しかも今回、それらの出版物には、女性向けの教養書や教訓書があり、それらにとりわけ妊娠や出産にまつわる記事がのり、育児論の輩出を生み、絵本・赤本が流行し、雛形の文様本にも子どもの姿があった等を合わせ考えれば、江戸の都市生活の活気と感性、づくりに女・子どもの果たした役割の大きさを改めて思うのでした。

本書の構成は、第一部「小さきもの」の増殖、第二部遊ぎする知性、第三部老いと死とに分かれ、各々興味深い論が6編収められています。それを通立させるものとして最初に本田氏の席において「女・子ども」と「江戸的なもの」の相互性が論じられます。わたしは、まずその美事な語り口（本田節）にひかれて声を出して賞味したほどでした。他の二氏も師にまさるとも劣らない洗練された美文家です。新々るび付とはいっても、声高に読むのをさえぎる単語や引用文もあって、冷や汗も出ます

が、夏の夜の知の比べにはもってこいかもしれません。半ばに至り、次の文に出合いました。

「王朝の女流文学にも紛うこの流麗な文章が、綴り続ける著者自身をも酔わせたであろうことは想像に難くない。そんな甘美な陶酔のなかで、この才女は綴りに綴り、ひたすら美しいことばの錦繡を紡ぎ続ける。このとき、先哲の教えか有職故実は、その婢娟たる筆の運びをどどこおりに運び進ませるための、恰好の素材であった。」（本書九七頁）評を受ける女流小説家と著者が、さながらにわたしの中で一体になってしまいました。

さて、先に述べた本書の三部構成・つまり記号化は、前者にその源流があつて、それをあわせ読むことで理解がますますに思えます、例えば、「『近世育児書』異聞」（子どもの領野から）には、この時代における「多様な階層から育児論を語る者が輩出」したことに目をむけ、三つの動きをすくい取っています。つまり「『小』の意味の発来」、「知識人の増殖」、「暗がりへの好奇心」

で、これらをもって時代の蠢動と人々の感性をあぶり出すのです。

森下みさ子氏の「憫笑『鼠の嫁入り』」は、「舞々」掲載時にも興味深く読ませていただいたのですが、今そのところを得て、ねずみによせて「小さきもの」の増殖の意味を鮮やかにみせてくれます。

その昔、私は人体に動物首が生々しくすえられた講談社の『こがね丸』の異様さに夢見した経験があるのですが、わやわやと怪しげに立ち働く線描の鼠の生活絵巻を面白く眺めました。こがね丸の犬は、なるほど、ねずみほど私たちの生活において両義的な役割をあわせもつてはなく、また、こがね丸が、仇討を完遂して親孝行を説く内容に対し、鼠たちが生産・台所仕事と家庭生活の営みを表わして、女への啓蒙に役立ちつつも、小さきが故に笑いを誘いつつ見下すものであったという違いに、今納得するのでした。

養育者の「慈」、しかも、その幼き者の命が「死の陰

翳に深々と取り囲まれている」ときの憂慮と危惧は、江戸期にいかずとも心打つものです。皆川美恵子氏の「桑柏日記にあらわれた子どもの病い」は、下級武士で、かつ孫を抱く祖父の、息子を見る父の10年にわたる日記体の書簡「家庭の記録」を資料に、私たちに「庶民生活のありさま」を伝え知る術を示してくれます。

子どもの病氣、それは当時、「6歳を無事に迎えることの出来る子供は、10人のうち7人以下」であり、しかも、疱瘡は死因の第一位で、生死を分けるものであったといえます。可愛げに成長した子どもの罹患は、家中の一大事であったことは想像されます。ここでは桑名と柏崎の地で、時を同じくして罹病した様子のうち、特に祖父の手で描かれた「疱瘡除けの呪い」から、無事かさぶたも落ちて全快後の配り事宴会まで、1年と4カ月の間の二〇余件にわたる事々の分析（この合計表は「子どもの領野から」「ひめやかな」「世界―子どもの『病氣』の意味するもの」に掲載されている）をふまえて、人々が病に「実にていねいにつき合う様子」を浮かびあがら

せていきます。そして、疱瘡の経過が、まさに、子どもにとって「人の仲間」に入る通過儀式であり、祝祭であったことを説き明かすのです。

一方、私どもを暗澹たる心地に誘う病が、別の子の二年にわたる胎毒をめぐるものです。「左の目ぐるりより耳のあたまへかけ岩の様」になってかゆがる子どもを母親のきくは、「懐へ入立過し」介抱し、憔悴していく様を記して、夫は「骨身もけづらるる様」と言います。一生一患の通過儀礼の様相をきれいに示した長男の病を描く祖父の筆と、胎毒の言葉の示す通り、「母の培地（旧根）」故と見われる病を得て苦しむ妻子を記す夫の筆とを対比して示しつつ更に、当時、家族が、地域共同体が子どもの育ちに深くかわっていたこと、そして父親が確実に家庭の人とでも在ったことを強く印象づけるのでした。

小児医学が進んだ今日、肉体の病は少くなり、『病』を通した子どもとの対応能力は遺憾ながら衰退しつつある」と切り込む皆川氏の言にうなずきつつ、心の病と

いう現代の苦をかかえる子と母の姿を思いました。「わたしたちの江戸」それは、江戸にすかして、わたしたちの生活を考えさせるものでした。

（大妻女子大学）

